21 世紀の市民社会へのアプローチ

清川ゆりこ

Approach to Civil Society in the 21 century

Yuriko Kiyokawa

本発表では、地域枠にとらわれずに大きく広がりをみせている参加型コミュニティに焦点を置き、バハイ共同体との類似性をとりあげることで、物資的側面だけではなく、精神面でも市民社会が成熟段階に入りつつある可能性をみる。一方、近代社会に生きつつも、部族民時代の感情、思考パターンをわたしたちは原型として保持している。その太古の昔から、現代に至るまで文化的進化を推進してきたものは本質的に変わらない。この要素はコミュニティの成長／衰退の分岐点であり、受容性を高めつつある人類が、約束されている最大平和に向かって歩みを進めることを裏付けるものである。

This presentation is aimed at examining the possibility that mankind is going into a phase of maturity with focus on a variety of participatory civil communities, each being a sort of civil society, spreading beyond regional boundaries. The maturity isn't measured only by material advancement but also by increased level of citizen's concern to spiritual value. The concern and interactive dynamics among them are found as similarity to Baha'i community. In the mean time, we have been maintaining emotional / thinking patterns since pre-historical time when we lived at tribal level. An element has been working since then as decisive factor behind community-growth/ decline. With aid of the element, mankind seems to keep moving on toward the promised great peace.

研究のポイント

1)「市民社会」が現代の一つのキーワードとなっている。参加型の市民社会、コミュニティとして、地方⇔地方、地方⇔国の間で 影響を及しあっている。

2) 上記の相互作用は、バハイ共同体とよく似ている。

3) その作用の根幹をなすものが、*草の根レベルの一人一人を大事にすること*、「個の尊

重」である。これは、高い発展性を示して いる各種の参加型市民社会でも変わらない。昨年の 11 月に世界各地で開催された地域大会についていえば、会期中、会期後で、参加者に「火」が付いたのはこれに起因すると考えられる。

4) コミュニティの発展に必要なものだけでなく、多様性他、バハイに関連した言葉が最近よく聞かれるように、物質面だけでなく精神面でも人類は成熟段階に入りつつあると考えられる。

5) 一方、類似する部分があるということは、そうではない部分があることを同時に意味している。参加型コミュニティの負の部分があちこちで露呈している。自由の意味の履き違え、同じコミュニティ内のマイナリティへの弾圧がこれを代表する。

6) コミュニティの前身である集団は、人類が部族民であった時代に形成された。共感の感情をより高く保持し、協力体制を培った部族が、＜非＞協力的集団に打ち勝ち、文明を築き上げてきた。人類が道徳的選択を興亡の歴史を通じてなしてきた一つの証拠である。

7) 噴出した負の部分を反面教師とし、現在も、市民社会では道徳的選択が行われている。幾多の戦争を含め、同じことは長い歴史を通じて、いくらでもみられてきた。急に今になって、よりよき進化への選択を止める方が考えにくい。それゆえ、大きく脱線することが時にはあっても、最大平和に向かって、歩みを進めているのが現代であると考えられる。

発表内容

21 世紀を端的に表すキーワードをあげるとしたら、その一つに「市民社会」があげられるかもしれない。「21 世紀」「社会」でオンライン検索をすると複数ヒットする。広辞苑によれば、『特権や身分的支配･隷属関係を廃し、自由･平等な個人によって構成される近代社会』が「市民社会」であるという。 だが偶然知るようになったわたしも含め、実際どれだけの人々が、この定義を知っているかはわからない。さらに一般市民と称されている人々で大部分構成される実態の社会が、真実そのように現在、あるとは正直いいがたい。逆説的にいえば、社会がこうあって欲しいという願望、近づこうと努力する先にある理想像がこの言葉の定義にこめられていないだろうか。

この言葉で気運が盛り上がりつつある一つの理由に、知識･経験を重ねた市民の増大がある。行政主導ではない、住民による、住民のための社会運営、問題解決に関心が高まるのも必然である。福祉や教育で、行政の手が届きにくい部分に、自由裁量でサービスを手がける NPO が増えてきている事実にこれは裏付けられている。別の要因として、表現の自由を追求する人の数が増えてきている事実も見逃せない。その気にさえなれば、

誰もがオンライン上でブログを自由に開設し、不特定多数の人々に向けた情報発信の主体となれる時代にすでにわたしたちは入っている。

こうして現代の世相自体がこの言葉、市民社会に反映されているが、実際にわたしたちが関わるべき対象として考える場合、漠然としてつかみようがない感がある。そんな中、「参加型」という言葉を最近耳にする。これを市民社会と組合せた「参加型市民社会」という言葉もあり、参加型のお祭りイベントなどとして、裾野を広げている。トップダウン式ではなく、参加者一人一人の個性がファシリテーターを通して引き出され、同じ目的の下に同じ高さの地平に立った者同士の交流がここでは促進されているのである。

このように、市民社会の参加型部分に着目すると、バハイ共同体との類似性がうかびあがってこないだろうか。というのも、ルヒ・スタディコースの学習の進め方に示唆されているように(Sandra Fotos、 尊田望、「ABS 第 16 回大会収録」より)、個人の成長は、ファシリテーターの手助けによる参加者一人一人の主体的な取り組みに委ねられた一面をバハイ共同体自体が内包している点による。だがこの効果は個人の成長にはとどまらない。共同体全体に及ぼす影響は時には劇的であるかもしれない。

万国正義院の呼びかけにより世界各地で開催された地区大会の例からわかるように、大会で受けた高揚感と刺激を、地元の LSA 発展のための燃料として参加者が用い、核活動を増幅し、その国の活動にフィードバック作用が還元された。たとえば、トロント大会の9週間後、核となる活動を以前は行っていなかったオンタリオ州の7つの B クラスターの信者 105 人が活動を始め、その結果、115 の新しい核となる活動と、9つのファイアサイドが生まれた。さらには、132 人が探究者として関心を寄せ、5 名が加入宣言をしている。その他の地域でも目覚しい成果がみられている(国際ティーチングセンター、「Reflections on Growth」)。

なぜそこまで盛り上がりをみせたかについてだが、草の根レベルで奮闘している一人一人のやる気で会場が熱気に包まれたと、マニラ大会に出席した日本からの参加者は語っていた。このやる気を高めたものは、参加型でこそ実現ができる<個の尊重>の雰囲気であることは想像に難くない。

「過去に様々な呼びかけがありましたが、今以上にあなたが必要とされた時代はありません。ルヒ・コースをやっていようが、いまいが、ティーチングをやっていようが、いまいが、そんなことは問題ではありません。あなたの力が今必要なのです」(国際ティーチングセンターのウォーカー女史、2008 年 12 月 8 日付け NSA 通信より)

会期後は、先のトロント大会後の様子に明らかなように、強力な支援体制が敷かれたことが、個人のイニシアチブを高める点で効果が大きい。こうしたサポートの中では、個人の主体性とやる気が高まり、集団となれば、松明のように燃え上がるのである。そしてその地区大会の会期中、会期後の影響作用の方向性は、地域、国、世界の各レベルの間で、双方向的、かつループ環状的である。前進的なエネルギーがさらなる好循環を生んだのである。

この動きは参加型市民社会でも変わらない。日本の夏祭りにさえそれは確認できるのである。たとえば「よさこい踊り」というものがある。例として取り上げるには唐突に聞こえると思われるが、地元⇔地元、地元⇔国という縦横の双方向性で影響を与え合っているものの好例である。これは、高知県を限定としたまちおこしの一環として考案された後、斬新さから YOSAKOI 祭りとして進化して全国に普及している。さらに各グループがよその地域の大会で受けた刺激を地元に持ち帰り、現地グループの発展のための研磨剤とし、さらに進歩させるという効果を生んでいる。

ネット空間でも、参加型コミュニティが多数見出されている。地域の制約を受けないだけに、広がるさまは加速度的である。「フェイスブック」に代表される交友の輪を広げることを目的にしたものから、オープン参加型百科事典「ウィキペディア」のように同じ目的の下に参加した同志が人種国籍に関係なく協力体制を築き上げるようなものまで形式は幅広い。また 7 月 25 日の国際人権デーでは、世界各地でイラン政府の政治犯の扱いに対し、手をつなぎ合うようにして一斉に抗議の声があげられたが、オンラインでのつながりがなければ、スムーズには連携できなかったかもしれない。

このように参加型コミュニティに目を向けると、地域枠を超えて、影響を与え合っていることがわかる。この作用は、バハイ共同体と、参加型市民社会とで同じであり、一般社会が精神文明と同調し前進していく点で成熟しつつある一つのサインであるといえないだろうか。

そして、バハイの理念を想起させる言葉、<多様性><ユニティ>があらゆる分野で聞かれるようになっており、閉会式中、後の、オリンピック参加選手の交歓からは、バハオラが言われた「人間はすべてひとつの地球家族に属する」ことが想起される。

だが、形式上の共通点のみによって、その傾向を推し量るべきではない。草の根で奮闘

する個々人の尊重こそに、成熟サインの焦点が置かれるべきなのである。

ところで、類似性があることは、そうでない部分があることに他ならない。そのもう一つの面こそ、注意を払うに値する。

Participatoryという単語を英々辞書で引くと、participatory democracyと関連語が即座に現れるように、参加型は民主主義と切り離すことはできない。その民主主義は定義が一様ではないが、代表原理は「自由」と「平等」に収束される。この二つの原理はそのまま、市民社会の辞書的定義に含まれているので、市民社会は民主主義の一つのかたちであると改めて言うことができよう。それゆえ民主主義の二原則を切り口に、現状を次の二点から考察してみたいと思う。

1)マイナリティが尊重されているか。多様性、個性の尊重の別の表現。多数決原理が適切に機能しているかの目安となる。『いかなる民主主義にも真の試練となるのが、少数派の公平な扱いにほかならない』（アラン・ロック:20世紀初頭の黒人バハイで哲学者:Iran Press Watch、2008年12月5日投稿、"Muslim Students Protest Baha'i Expelled from Iranian University"より）

2)自由の意味。これも多様性、個性の尊重の別の表現。単純に、いろんな意見、表現があってよいじゃないかでは、言論の自由、表現の自由の名の下の、名誉毀損やプライバシーの侵害を招きやすい。また匿名性の名の下の自由な表現は注意が要る。

近年、流行した言葉であるKY<空気読めない>に代表されるように、特に若い人たちの間で一集団の中のマイナリティを排除する傾向がある。元来は個々であった存在が集まって大多数意見を形成するようになると強大な勢力となる。その KY の意味である、場の雰囲気を読めない人は、「和」を乱すものとして疎外されやすい。大多数意見こそ強いという見方が助長され、何が本当に正しい基準であるかに重点は置かれることはない。また KY に分類される人々のタイプは、周囲の雰囲気に鈍感、だから空気が読めない、という単純な公式で整理されるだけでは終わらない。特に学校現場では、集団から、傑出するか、落ちこぼれた生徒が、KYだというように拡大解釈されている向きさえうかがえると、保護者会時に子どもの学級担任は語っていた。平均化が尊ばれる風潮の中では、平均値を外れたものたちは、空気を読めないと烙印を押されている。こうした歪んだ「和」の倫理によって形成されるコミュニティは、しばしば誤った多数決原理によって動かされ、携帯電話を中心とした「参加型」ネット空間で、匿名によるマイナリティ攻撃へとつながっている。平

均でいることを求められる一方で、競争に駆り立てられるという矛盾した環境の中で葛藤する子どもたちの気持ちのはけ口として機能しているとも指摘されている。

ところで、ある本(「行動経済学：経済は感情で動いている」、友野典男、光文社新書)から、人間の文化的進化について触れた箇所を偶然みつけた。それによれば、コミュニティの前身である集団は、協力的／非協力的集団に二分化されるという。これは国家も都市もできる以前の遥か昔の、人間が部族民レベルで生活していた時代を起源とし、協力的集団は、一つの目的の下に団結する結束力により、より多くの物資を手にし、その集団が持つ文化を押し広げる可能性を高めている。一方、非協力的集団は求心力のなさが主因で自然淘汰される運命となる。この箇所はさらに次の引用文をもって考察が与えられている。

> 「道徳性の高さは、特定の一個人やその子どもたちを、同じ部族のほかのメンバーに比べて、ほとんど、またはまったく有利にするものではないが、道徳の水準が上がり、そのような性質を備えた人物の数が増えれば、その部族が他の部族に対して非常に有利になるだろうということは忘れてはならない。愛国心、忠誠、従順、勇気、そして共感の感情をより高く保持していて、たがいに助け合ったり、全員の利益のために自分を犠牲にする用意のあるような人物をたくさん擁している部族が、他の部族に打ち勝つだろうことは間違いない。これは自然淘汰である。いつの時代にも、世界のどこでも、ある部族が他の部族に置きかわってきた。そして、道徳は彼らの成功の一要因であるので、世界のどこでも道徳の標準は向上し、よりよい道徳を身につけた人間の数が増加したのである」(ダーウィン 1871)。

この文章をかの著名な進化論者が、バハオラの宣言の数年後にして書いているというのも、潜在意識で受けたインスピレーションによるものだろうかと想像が膨らむ。

世界市民であるわたしたちも元をただせば、部族民である。学校や職場、街角、裏通りは構成する人の内訳はさまざまな一種のコミュニティ、市民社会であるが、その現場では今でも先史時代の部族間闘争を思わせるような動きが繰り広げられている。先のKYの例、ネット空間のマイナリティ弾圧の例も、健全とは程遠いが、＜一致協力＞の一つのかたちにほかならない。

だが部族民性は、個体同士が寄り添い、一緒に働いていくための欠くべからず初期要件であり、これなくしては文明の萌芽はあり得なかった。＜一致協力＞をどの方向性で用いるかで、結果が分かれてくるのである。現代に生きつつも、部族民性を人格の根の部分

に保存したのが私たちである。その部分を肯定しつつ、現代社会で理想的な方向に舵取りするには、「道徳は彼らの成功の一要因」の言葉が参考になるかもしれない。そしてこの言葉は、道徳は戦略となることの言い換えである。

景気後退の中でも、社員のやる気を高めることで、生産性を高め、成功している企業は少なくない。自由競争原理の下のシェア争いも、本質的には、部族間闘争と変わらないが、その枠組みの中で、情報開示による透明性、嘘偽りのない顧客重視の取引など、企業倫理、道徳に基づいて経営を行い成功している例は非常に多い。こうした事実からも、道徳はすでに戦略として活用されていることがうかがえよう。社員のやる気は、マイナリティの尊重に、自由競争原理の中での嘘偽りのない取引は、自由の正しい解釈として機能している。匿名性も、個人の安全を守りつつ、情報開示の透明性を高めるためには、必要とされる要素である。

こうした道徳の活用は、ここ数年に立て続けに世間で勃発した反面教師的事件から学んだ部分も少なくない。太古の時代から、部族として生き延びていくために協力し合う一方で、衰滅していく他部族を反面教師とした歴史の中で、よりよきものを選択していく精神文化が、物質文明を築き上げつつあった人類の間で育まれた。これは民族興亡の歴史を通じて、世界各地で共通してなされてきたことである。急に今になって、よりよき進化への選択を止める方が考えにくい。

そしてこの 21 世紀にその精神文化は継承されている。2008 年 10 月 20 日付けの万国正義院のメッセージによれば、「物質文明と精神文明は共に進歩すべき」とされている。物質主義に傾き、大きく脱線することが時にあり、市民社会の定義とかけ離れた様相を示すことがあっても、バハオラが明言されている最大平和に向かって、歩みを進めているのが現代という時代であると考えられる。

引用文献

友野典男 「行動経済学：経済は感情で動いている」、光文社新書
国際ティーチングセンター、「Reflections on Growth」)。
ダーウィン 1871
アラン・ロック Iran Press Watch、2008 年 12 月 5 日投稿、"Muslim Students Protest Baha'i Expelled from Iranian University"
Fotos, S.(2008). 「ABS 第 16 回大会収録」、日本バハイ学術研究会.
尊田 望(2008)、「ABS 第 16 回大会収録」、日本バハイ学術研究会.